

カンガルーシップ活動 共生プロジェクト 実施報告書

報告日	平成29年2月24日(金)
主管学校名	山形大学附属幼稚園
P T A会長名	菅野 大輔

実施概要	主管校	山形大学附属幼稚園
	交流校	山形大学附属特別支援学校、山形大学
	実施活動名	みんなともだち なかよくなるう(交流活動、バザー参加&修繕)
	実施日時	平成28年6月20・21・22日(交流) 10月31日・11月1・2日(交流) 11月30日(製品バザー) 平成29年2月23日(修繕)
	実施場所	山形大学附属幼稚園、山形大学小白川キャンパス(バザー開催場所)
	実施目的	・本園の園児、保護者と職員が特別支援学校の児童、生徒、職員との交流活動を重ねて、同じ附属学校の仲間として互いに理解を深める。
実施概要	実施内容	1 特別支援学校の小学部児童と本園の園児との遊びを通じた交流体験 2 園児、保護者の特別支援学校高等部製品バザーへの参加 3 園がこれまでに購入した支援学校バザーの製品の修繕 4 園児が使用できる製品開発
	実施方法	1 特別支援学校小学部低学年が本園を訪問し、3日間連続で(初夏、秋)2回、園児との交流を図る。 2 園児とその保護者が製品バザーに参加し、買い物を楽しみながら特別支援学校高等部の生徒との交流や製品購入を楽しむ。 3 園児が使用するベンチ、テーブル、本棚等を購入する。 4 特別支援学校高等部の生徒が本園に来て、これまで購入したベンチ等の修繕を行う。 5 製品を特別支援学校と共に開発し、購入して園環境を整える。
	参加人数	幼稚園園児、保護者、特別支援学校児童、生徒、職員 約190名

報告事項	内容	1 特別支援学校小学部低学年が先生と共に本園を訪問した。3日間連続で(初夏、秋)2回、室内や屋外での遊びを通して園児との交流を図った。 2 特別支援学校主催の製品バザー(於山形大学小白川キャンパス)に、附属幼稚園園児(4歳児)がバスを利用し参加。園児は各自100円を持参し、特別支援学校高等部の生徒が手作りした製品を幾つか選び、買い物を楽しんだ。保護者は各自でバザーに参加した。 3 特別支援学校高等部生徒が本園を訪問し、これまで購入した製品の修繕を行った。高さ調整や、やすりがけネジ締め等、細かい作業をしている様子を、園児や保護者が参観した。 4 購入した本棚をさらに園生活や園児に合わせたデザインを希望するなど、特別支援学校と園とで共同開発した。
	結果	1 園児と特別支援低学年の児童は交流を重ねる度に自然と仲良くなっていた。特に、年長児は特別支援の児童が何をしたいのかを理解しようと、本人に聞いてわからない場合は先生に尋ねたり道具を貸してあげたりして積極的にかかわろうとする様子が見えた。最終日は、名残惜しそうに見送る園児達の姿があり、交流の深まりを感じた。 2 共生プロジェクト助成金を活用し、園児は100円(10円玉10枚)を持ちバスに乗ってバザーに参加。商品は10円から設定されており、「ミニレターセット」「マグネット」「木製キーホルダー」等多くの手作り製品を悩みながら2つ、3つ選び、楽しく買い物をしていた。バザーに参加した保護者は、園児用に低価格で用意された小物の一つ一つが大変丁寧に作られていることに感激していた。 3 日々活用している自分達のベンチが、目の前で修繕される様子を興味深く参観した。園児たちは壊れている部分が綺麗に直って喜び、特別支援学校高等部の生徒に感謝の気持ちを伝えることができた。 4 園と支援学校と保護者が協力して園児のための製品を開発し、園児が有効に使うことができた。
	所感	特別支援学校の児童との交流で、当初戸惑っていた園児達が時間と共に相手のことを理解して自然と仲良くなっていく様子が印象的でした。また、バザーや修繕で出会った特別支援高等部の生徒さんたちが、一生懸命で誠実にかかわってくれたことが心に響いたようでした。障がいの有無にかかわらずお互いの存在を認め合うような交流活動を今後も続けて参りたいと思います。今年度もカンガルーシップ活動助成金事業により、有意義な交流活動が出来ましたことに感謝いたします。

添付書類

実地報告書掲載可







カンガルーシップ活動 共生プロジェクト参加感想

提出日	平成29年2月24日(金)
学校名	山形大学附属幼稚園
学年	3・4・5歳児・高等部

(バザーについて)

～園児の声より～

- ・友達が選んでいるものとお揃いのものを選んだよ。いくらかお兄さんが教えてくれた。
- ・自分の財布にいっぱいお金が入っていてワクワクした。初めて自分で買ったよ！
- ・友達と買ったものを見せ合いっこしたのが楽しかったよ。
- ・お姉さんが「あと20円だったらこれを買えるよ」と教えてくれて、これ（はがき）を買ったの。
- ・お家に飾れるものを選んだよ。お母さんにおみやげも買ったよ。
- ・お兄さんに「これください」って恥ずかしくて言えなかったけど、「ありがとう」って言ってくれて嬉しかった。
- ・木の棒(自分で描けるキーホルダー)は何に使うか分からなかったけど、お兄さんが使い方を教えてくれた。
- ・買ったものを計算してくれるのが、早かった！
- ・何を買ったらいいのか迷っていたら、財布の中のお金を見てくれて、あとこれとこれを買えるよって教えてくれた。

(修繕について)

～園児の声より～

- ・ガタガタしていたけど、ガタガタしなくなった！！直してくれてありがとう！
- ・お兄さんがトントンしてくれて、座るところが平らになったよ。かっこよかったよ。
- ・お兄さんたちが、あのベンチを作っているんだと初めて知った。直しに来てくれるなんてすごい！
- ・ギューンっていう音が大きくてびっくりしたよ。お兄さんが直すのを見られておもしろかった。
- ・ベンチを運ぶの頑張ったよ(合計22個！)全部お兄さんが直してくれた！！
- ・これからも大事に使います。
- ・おうちでもトントンしてみたいです。

～特別支援学校 高等部生徒の声～

- ・(直している時)近くで見られて緊張した。「頑張れ」って言ってくれたので頑張った。
- ・「ありがとうございました」とお礼を言ってくれた。恥ずかしかったけど嬉しかった。
- ・(作ったものを)使ってくれて、嬉しいです。強く叩かないで大事に使って下さい。
- ・ドリルの音が出る度にキーンって言っていて、面白かった。

カンガルーシップ活動 共生プロジェクト参加感想

提出日 平成29年2月24日(水)

学校名 山形大学附属幼稚園

(交流活動について)

特別支援学校低学年の児童と、園児と一緒に関わって遊ぶ姿をたくさん見ました。同じ遊びに居合わせどンドンその遊びに没頭していく特別支援の児童をじっと見ている園児や、一見交わっていないように見えて、園児の行動を観察しているうちにロープ渡りの遊び方を覚えていった特別支援の児童など、様々なかかわり方がありました。中には特別支援の児童同士のトラブルもありました。一例を挙げますと、A君の使っている物がどうしても欲しくなるB君に同じ物を探してきて渡そうとした年長児がいました。それでもB君の気持ちが治まらずどうしたら解決するかを考えていましたが、B君にしばらく寄り添い、その後、一緒にサッカーをして楽しむ姿がありました。目の前にいる友達にどのようにかかわればいいのかを考える園児達の姿をみて、この度のこの交流が、この年齢で行われたことは大変意味深いと思いました。障がいの有無にかかわらず世の中には様々な人がいて、それが当たり前であるということが自然と感じ取ることができる大変有意義な交流であり、この時期に必要な体験だと感じました。

また、今回の交流活動で仲良くなり、後日行われた特別支援学校の発表会を家族で見に行き再会を喜んだ園児もいたようです。このことから園児と特別支援学校の子ども達が繋がる機会となった今回の交流活動は、大変実りの多い試みだったと感じました。

個人的には、特別支援学校の先生方が児童達に接する様子が大変参考になりました。駄目なことは駄目としっかり伝えていることや、友達の物を勝手に取った場合に「貸して(両手の手のひらを上に向けてトントンする)」と伝えることを絶対に諦めずに伝えて、妥協せず必ず本人にさせている姿からは学ぶことがたくさんありました。

(バザー)

- ・園児は初めて自分のお金を持つ子が殆どで、モジモジしていてお店の人に「お願いします」と言うのは難しいことのようにだった。大人やお兄さんたちの手助けでなんとか買えたようだった。
- ・この経験は子ども達の「またやってみたい!」に繋がるのだと思った。
- ・子ども達が買いやすい価格のものを、園児到着時間まで取っておいてもらえて良かった。
- ・特別支援学校の学生さんが、普段どのようなことに挑戦して作品作りをしているのかが分かった(完成度が高かった)。
- ・とても丁寧に作られていて使いやすく工夫もされていた。(例えば、野菜カゴ(大)は底がスライドで外れるので洗いやすい)人気商品ですぐ売れていくので私も購入したが、本当に使い勝手が良い。
- ・アクリルたわしが薄く作られていたので(コップなど食器を洗いやすい)「これお母さん喜ぶかも」と言ったら、選んでいる子どもがいて、優しい心に感動した。
- ・その場で買いたいものを決める子。仲良しの友達と同じものを買う子。家族にお土産を買う子。持ってきたお金も全部使う子と使わない子。三者三様であり、小さい園児ではあるが、子どもなりの考えが既にあることが興味深かった。

(修繕)

- ・子ども達はどのベンチがガタガタしているのか熟知しているので、そのベンチが目前で直っていく様子を興味深そうに見ていた。物を大切に使うことを学ぶ良い機会になったと思う。
- ・一生懸命直してくれる特別支援のお兄さんの姿をみて、園児の中には保育室から木のトンカチを持ってきて真似る姿があった。家でもやってみたいと言う子もいたり、モノ作りや修繕に対して関心を持ったりしたようだ。
- ・年長・年中児童はじっと見ていたが、年少は電動ドリルの音に反応して歓声をあげた。最初、お兄さんは何で騒いでいるか分からなかったようだったが徐々に気付き、最後は笑顔で園児の反応を楽しみながら作業していた。
- ・特別支援学校の先生が生徒に直し方をアドバイスするのではなく、自分で考えて行動する生徒の姿が頼もしく見えた。
- ・家でも、すぐに買い替えたり捨てたりしないで、子どもと一緒に修繕してみたいと思った。

(製品開発)

- ・園と特別支援学校と保護者が協力し、園児たちが使用しやすいように棚板を変えられる「マルチラック」を開発できたことは、大変有意義な事だと思う。園児たち自身で「お願いします」と発注し「分かりました」と特別支援学校の生徒さんが直接引き受けて下さった。園児たちが喜んで使っている姿をみて、やりがいを感じている。また今後マルチラックに不具合が起きてても、修繕活動によって大切に使い続けられることを願っている。